早稲田大学 2018年度
一般入試 文学部

国語

（問題）

2018年度

〈2018 H30122024〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は3～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

（2）マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	◎悪い	◎悪い	
マークを消す時	○良い	◎悪い	◎悪い	

5 記述解答用紙記入上の注意

（1）記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。

（2）所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

（3）受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	
0	
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	

（4）受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

（例）
3825番
⇩

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。

8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ヴィクトール・E・フランクルは、アウシュヴィッツ強制収容所に収容されていたときの自分の身体について、こう振り返っている。「皮下脂肪の最後の残りまで費やされてしまうと、われわれは皮膚とその上にいくらかボロを纏った骸骨のように見えるのであった。そしてその時われわれは如何に身体が自分自身を貪り始めたかを見うるのであった、すなわち有機体が自らの蛋白質を食いつくし筋肉組織が消えて行くのである」(『夜と霧』霜山徳爾訳)。フランクルはつづけて、自分の身体が自分のものではなく、ただの肉のように感じたとも語っている。

ダッハウ、アウシュヴィッツ、ザクセンハウゼン、ノイエンガメ、トレブリンカなど、どこのナチスの強制収容所にも厨房と食堂があった。囚人たちは、法的な保護の外に置かれていた。それでもナチスは、彼らや彼女らから台所まで奪いはしなかった。罰として食事が抜かれることがあっても、許されれば食事が与えられた。囚人たちは、それでもまだ「労働力」だったからだ。戦争の遂行とともにドイツ人労働力が圧倒的に不足するなかで、強制収容所に工場を併設したのは、一部企業化していた親衛隊だけではない。IGファルベン、クルップ、ジーメンスなどの大企業が、人間の基本的な権利を奪われたアウシュヴィッツの囚人たちを、コストの極めて安い労働力として利用したのである。

ようするに、『夜と霧』を再読して気づいたことは、企業の労働力として考えたときの囚人のコストの安さの秘密は、自分自身を食べることにあった、という単純な事実である。毎日収容所から配給される食べものだけでは生命を維持できない囚人たちは、フランクルのいうように、ひとかけらのパンを食べつくしたあと、ついには自分たちを食べはじめる。自分たちの肉体に残っている脂質を、そして筋肉組織を、貪りはじめるのである。刃物も火も必要としない、究極的な台所の [A] といえよう。

収容所の台所から、ほとんどまともな食べものが出てこない以上、囚人たちは、自分たちの身体のなかに、刃物も火も必要ないもっとも効率のよい、もっともコンパクトな台所を建設する。台所で制圧するのは、動植物ではなく、自分自身である。このような状況に対する二種のとまどいを、フランクルは的確に「人間の肉でしかない」と表現したのだ。

ところで、もうひとつ、近代のキッチンの「究極の姿」を紹介しよう。主婦は「機械」になるべきだ、という第二次世界大戦下ドイツのレシピ集『料理をしよう!』での表現である。台所のなかに人間が埋め込まれる、というものだ。非戦闘員も容赦なく戦争に巻き込む総力戦のなかで、主婦に要請されたのは、機械のように寸分の間違いもなく、ありとあらゆる無駄を排除し、台所仕事をこなすことであった。

「人間のなかに台所を埋め込むこと」と「台所のなかに人間を埋め込むこと」——それぞれ台所の合理化を強制させられた囚人と主婦は、なるほどたしかに、まったく次元の異なる存在である。しかしながら、わたしは、この両者のあり方に、近現代人が求めてきた食の機能主義の究極的な姿を認めざるをえない。どちらも、人間ではなくシステムを優先し、どちらも、「食べること」という人類の基本的な [B] をかぎりなく「栄養摂取」に近づけているのだ。

いうまでもなく、このような近代キッチンの五里霧中状態、「食べること」の凋衰(ちょうすい)は、現在の日本社会でも日常的に見ることができる。たとえば、食べる時間を削って仕事に充ててきた日本の猛烈サラリーマンたちの行き着いた先が、「瞬間チャージ」が謳われる栄養機能食品であったことは、無数のドラッグストアやコンビニエンスストアが証言してくれるだろう。

では、どうして、「食べること」はここまで衰微してしまったのだろうか。どうして、強制収容所というわたしたちの生活世界からもっとも遠いところの現象が、こんなにもリアルに感じられるのだろうか。

これは、端的に言ってしまえば、この世界が、[C] だからである。「餓死」や「孤独死」はそれほど珍しいことではない。二十四時間営業のコンビニや居酒屋の「雇われ店長」、あるいは慢性的に労働力が不足する看護師に、彼らの執行部が求める仕事の量と質は、場合によっては、人間の生命維持活動に支障を来たすほどである。

ただ、この日本でさえ恵まれている、といわざるをえない現実もある。いま、地球は、飢餓人口を十億人近く抱えていると推定されている。飢える人びとは、難民や政治犯や失業者というかたちで社会から排除させられたために、やむをえず、台所をみずからの身体に埋め込まねばならない。難民キャンプやシェルターにたどり着けなければ、彼らや彼女らは、最終的にはみずからを食べはじめ、痩せ衰えていく。この現在の状況と、フランクルの証言から垣間見える強制収容所の状況は、どれほど異なるだろうか。

では、どうして、このようなことになったのか。それは、いま、地球上を覆う資本主義というシステムの問題に尽きる。資本主義が、一本の長い槍のような右肩上がりの発展という物語を紡げたのは、その土台に持続的な循環システムがあったからである。たしかに、資本主義も循環をもつ。お金と景気が循環して成り立っている。だが、それは真の循環ではない。これはただ、つるつると世界を回っているだけである。[1]真の循環システムが、絶え間なく、労働力と自然資源という絶対に工場で作ることのできないものを市場に供給し、生物の死骸を土に戻すからこそ、猛烈サラリーマンは猛烈たりえたのだ。

たとえば、土壌という暗闇の世界では無数の小動物、昆虫、バクテリアが活動しているが、その分解作用によって、有機物は無機物になり、植物に吸い上げられて、その植物は動物や人間に食べられる。大気や水が循環することで、工場の排出した煙や廃棄物は拡散し、人間社会には絶え間なく淡水が供給される。森林は、二酸化炭素を吸って酸素を吐き出しながら光合成を行なう。自然のコストが安いのは、それが、人間が構築できないほど高度な循環システムを有しているからである。

これと同じように家庭もまた、社会の循環システムを担っていた。労働力は、毎日、天から降ってきたり、土の中から湧いてきたりするわけではない。疲れ果てた夫や子どもや自分の肉体と精神を明日の出勤・通学時刻までに回復させ、老化し消耗し続ける夫や自分に代わる次世代の労働力を、みずからの子宮とベビーカーで育て上げる無限の愛の空間——つまり「家庭」がなければ、資本主義は成り立たないのである。

さらには、底辺社会もまた循環システムにほかならなかった。それはちょうど、明治時代の作家・ジャーナリストとして知られる松原岩五郎が『最暗黒之東京』(一八九三)のなかで活写した、残飯屋の光景に体現されている。ここでは、士官学校

の給食や歓楽街の料理の残りものを、残飯屋がスラムに運び、安い値段で売る。これによって、本来はゴミになるはずの残飯が食事となり、低コストで慢性的に飢えている底辺の住人の明日のエネルギーに変換される。この底辺の住人は、日雇い労働者として、つまり、日本経済の最低賃金水準の労働力として、社会を支えることになる。底辺のギリギリの生命維持費用によってこそ、安価な賃金が生まれ、そのラインが、それよりも少しだけ賃金の高い労働者の賃金カットを正当化していく。

松原の著書のタイトルがいみじくも表現しているように、自前で循環する底辺社会は「最暗黒」と名指され、不可視化されてきた。そして、イヴァン・イリイチが家事労働をシャドウ・ワークと呼んだように、家庭もまた、市場の評価の外に置かれ、それゆえ、市場世界のアクターの視界から閉ざされてきた。たくましい想像力がなければ、自分の留守中の家のことや、地面の下の豊かな生態系を思い描くことは難しい。しかし、その闇から、資本主義は容赦なく労働力と自然資源を吸い上げつづけてきたのだ。当然ながら、循環世界は疲弊する。足尾鉱毒事件や水俣病などの「公害」と呼ばれる企業害から家庭内暴力に至るまで、疲弊現象は、さまざまな場面で噴出しているのである。

この疲弊は、現代資本主義の成立期からすでに支配者も無視できないほどに深まっていた。資本主義の土台を支える循環過程を破壊することは、資本主義自身の存在を危うくする。世紀転換期に世界分割がほぼ終わり、列強が無尽蔵な人的および自然資源の吸収を望めなくなったとき、資本主義は、テイラー・システムを発明したのである。これは台所に導入され、主婦の仕事の軽減をはかる。さらに、それに強く影響を受けた建築家たちが貧しい労働者のために団地を設計し、そこにモダン・キッチンを設置した。これによって、労働力の再生産は息を吹き返したようにみえた。

ところが、テイラー・システムにはふたつの大きな落とし穴があった。ひとつは、「シャドウ・ワーク」に科学の光が当てられたことで、台所もまた市場経済に併呑されてしまったことである。主婦のまわりのあらゆるものが商品化し、主婦の仕事は軽減したようにみえたが、新しい高価な電化製品を購入するために家計はますます苦しくなり、新しい家電が増えることで「お母さんは忙しくなるばかり」――ここに悪循環が生まれる。

もうひとつは、生活のなかでこれまですり込まれた身体や精神の癖をリセットし、動物の調教のように「科学」をたたき込まなければ成り立たない、という基本理念だ。こうなると、［　　D　　］。「人間のなかに台所を埋め込むこと」と「台所のなかに人間を埋め込むこと」は、この落とし穴にはまってしまった結果なのだ。

つまり、ナチスの強制収容所の囚人たちは、よくいわれるように近代市民社会＝資本主義社会に抵抗することが何をもたらすかを指し示していたのではなく、資本主義発達史の光によって閉ざされてきた陰の循環過程が帯びるこのうえない悲惨さを、素直に表わしていたのだった。労働の代価として、生命をギリギリで保つ分量のパンとスープだけしか与えないという施設は、人件費を極限までゼロに近づけるという資本主義によって実現された「ユートピア」でもある。この、一度表出した無意識は元に戻りえないし、現に戻っていない。ナチズムは、テイラー主義によって、資本主義の無意識を暴走させたのである。

では、わたしたちは、どのようにして資本主義社会の「迷える子羊」である台所を救出し、再生できるのだろうか。

2 フランツ・カフカの「断食芸人」という作品は、台所を救出するためのヒントを与えてくれる。これは「飢え」を「芸術」として生計を立てる男を描いた短篇小説である。第一次世界大戦後の食糧欠乏のなか、旧ドイツ帝国や旧ハプスブルク帝国内の社会の底辺での飢餓がようやく落ち着き始めた一九二二年に、この小説が発表された歴史的な意味は、小さくないだろう。カフカは、断食芸人への関心が世間から失われていく様子を淡々と描いている。

しかし、この断食芸人が孤立していく過程は、逆にいえば、飢餓とは自分自身を料理し、食べることにある、という事実を近現代人が忘れていく過程と、奇妙に重なり合っている。毎日の食事に潜む美も、日々飢え死にする子どもたちをも忘却の彼方に押し込むことで、ようやくこの世界は、愉快そうに、かつ楽しそうにみえる。しかも、断食芸人は、死ぬ間際に、「いったいどうして他にしようがなかったのか」と尋ねた監督の耳元で、唇を尖らせながらこうささやいている。「自分の口にあう食べものを見つけられなかったからだよ。見つけていたら、こんな見世物なんてやらなかっただろうし、あんたや他のみんなと同じように、腹いっぱいに食べていたことだろう」。断食芸人は、世界の「食べること」と「食べるもの」の美学的な劣化を告発したあと、藁(わら)くずと一緒に廃棄されていくのである。

この救いようのない話は、しかし、ひとつの台所救出の鍵を暗示しているように思える。「料理をすること」と「食べること」は、それがたとえ毎日繰り返されるものであっても芸術と呼ぶに値する美的行為である、という事実である。断食芸人は、本当に自分にとって美味しいと思える食べものと出会ったとき、断食という芸を捨てただろう。ということは、「美味しい」という感覚を心から味わえなかったからこそ、飢え、つまり自分自身を食べることによって「美」を求めたのである。

これが意味するのは、これまで成長至上主義的な「直線世界」によって「闇」だの「影」だのと形容されてきた「循環世界」には、実は「直線世界」よりも充実した美や生が存在している、ということである。もちろん、残飯屋でしか生きていけないという生活は、あってはならない。ひとつの性だけが台所のなかに拘束されるということも、けっして良いことではない。飢えは、地球上から追放されなければならない。「最暗黒」は理想郷であってはならないのだ。

だが、もしも、これらの「循環世界」が、一家庭、一社会の外へと拡がって別の家庭や社会と結びつき、街頭に台所が増殖し、そこで過ごす時間を資本主義社会発展のために過ごす時間から奪還し、その台所からコミュニティが再生または誕生し、3 まったく新しい巨大な「最暗黒＝循環世界」のネットワークを紡いでいったら、そのとき、「最暗黒」とそれを照らそうとする「光」は反転するだろう。みんなで一緒に作って、食べて、片づけることは、実に楽しく、美しい。その時間を惜しんで成長に邁進する社会こそが「最暗黒」であったことに、光の世界の住人たちは、そのとき初めて気づくはずである。

（藤原辰史「「食べること」の救出に向けて――『ナチスのキッチン』あとがきにかえて」による）

注　シャドウ・ワーク…人間生活に必要不可欠だが、家事労働のように賃金の支払いを受けない労働。
テイラー・システム…アメリカの技師テイラーが編み出した労働の科学的管理法。

問一　空欄 A に入る最も適切な**三字**の語句を本文の中から抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問二　空欄 B に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　生命維持　　ロ　人権　　ハ　文化行為　　ニ　生理

問三　空欄 C に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　シェルターそのもの　　ロ　ナチズムと陸続き　　ハ　五里霧中状態　　ニ　ドラッグストア

問四　傍線部1「真の循環システム」とあるが、その例として**適切でないもの**を、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　毎日繰り返される「料理をすること」と「食べること」
ロ　地面の下の豊かな生態系
ハ　次世代の労働力を育て上げる家庭
ニ　近現代人が求めてきた食の機能主義

問五　空欄 D に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　「人間」はシステムから退場せざるをえない
ロ　「科学」による調教と生活とが拮抗する
ハ　新しい高価な家電製品を購入するしかない
ニ　労働力の再生産はもはや不可能となる

問六　傍線部2「フランツ・カフカの「断食芸人」という作品は、台所を救出するためのヒントを与えてくれる」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　カフカの「断食芸人」の主人公は、成長至上主義社会で美味しいものに出会ったことがなく、自らを食べる断食を芸としたので、本来は毎日繰り返される「料理すること」「食べること」に充実した生や美があるのを暗示しているから。
ロ　カフカの「断食芸人」は、ナチスの強制収容所でやがておきるであろう飢えと労働との悪しき結びつきを正確に予測し、資本主義社会が続くなら真の台所の建設も、食べるという美的行為もいっさいありえないことを告発したから。
ハ　カフカの「断食芸人」が書かれたのは、社会の底辺での飢餓がようやく落ち着き始めた時期であり、物語内では、これから二度と飢餓で自分の身体を食うことがないように、誰もが実際の台所をもつことが必要だと訴えているから。
ニ　カフカの「断食芸人」は、日々自分の身体を食い、飢え死ににいたる世界中の人々を忘れてはならぬと、芸によって飢餓を可視化する男をえがき、主婦だけでなく男たちもまた台所の重要性に気づくことが大切だと主張しているから。

問七　傍線部3「「最暗黒」とそれを照らそうとする「光」は反転する」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　「最暗黒」としてこれまで底辺社会を蔑んできた資本主義が自らを暗黒と認知し、底辺社会の持続にこそ今後の社会の「光」があると反転する、ということ。
ロ　「最暗黒」と見なされてきた社会にこそ、みんなで一緒に作って、食べる楽しさがあり、そのためには資本主義の「光」を借りる必要はない、ということ。
ハ　「最暗黒」の社会は飢餓に近く、そこには希望の「光」はないという見方は間違いであり、「最暗黒」と「光」とは交互にやってくるものだ、ということ。
ニ　「最暗黒」がじつは食の可能性に開かれた循環世界でもあり、逆に「光」の体現者であったはずの資本主義は飢えに行き着く悪しきシステムである、いうこと。

問八　次の中から本文の趣旨に合致するものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　刃物も火もない、主婦にとってきわめて安全で便利な、理想の台所の一帰結として、現代日本ではすでに「瞬間チャージ」とよばれる優れた栄養機能食品がある。
ロ　資本主義は、その外部に労働力と自然を求めて侵略を繰り返したのちに、内部に残されていた労働力と自然を食いつくしたので、ほんとうは破滅している。
ハ　極端に安価な労働力だったナチスの強制収容所の囚人は、資本主義社会に抵抗してもたらされたのではなく、むしろ資本主義の「ユートピア」の実現だった。
ニ　街頭のいたるところに台所が増殖し、そこで過ごすことが楽しみになる人々が多くなれば、人間社会の循環システムは豊かな資本主義のもとでこそ再生できる。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

録音技術の登場は、音楽にどのような本質的影響を及ぼしたのだろう？　技術が登場した初期、これを本質的に活用して音楽の可能性を切り開いた人としてバルトーク・ベラの名前を挙げるべきだろう。

二〇世紀初頭、ハンガリーのピアニスト・作曲家バルトーク・ベラは、友人の音楽学者・作曲家コダーイ・ゾルターンと共に、当時最新技術だった蠟管蓄音機を手に、敷設されたばかりの鉄道網を活用して東ヨーロッパ各地で民謡の録音採集を行った。

彼らの取り組みは、今日の民族音楽学ではきわめて一般的な「フィールドワーク」だ。彼らはこれをゼロから手探りで確立した。ただコダーイとバルトークとでは録音機器の用い方が大きく異なっていた。コダーイが比較的ナイーヴに、耳で聴くとおりの民謡を録音でも確認したに留まるのに対して、バルトークは録音されたコンテンツにさまざまな「変調」を施した。

現場でサンプリングした民謡をゆっくり再生すると、高速再生時には気にせず聴き飛ばしていた細部が見えてくる。おおまかに八分の六拍子だと思っていた音楽が時々八分の五拍子や八分の七拍子になっていたりする。そうした細部に気づき、新鮮な驚きをもって正確に採譜したのがバルトークだった。微細な変拍子の愉悦に気づくことで、バルトークは自身の作曲語法でも、コダーイと比較にならない豊かなリズムの世界を創り出した。

さらにバルトークは、蠟管蓄音機の低速回転や高速回転、さらには加速や減速の過程で発生する、かつて誰も聴いたことがなかった響き、メディアの生み出したノイズそのものにも鋭く着目する。彼の管弦楽曲や弦楽四重奏曲には、蠟管蓄音機で「遊んだ」成果と思われる、かつて人類が楽譜に記したことのなかった不可思議で繊細な響きを随所に見つけることができる。

バルトークのカジョウな情熱には背景がいくつかあると思う。一つは個人としての「偏愛」だろう。だがもう一つは「方法」からの創出だ。すでに出来上がった、お決まりのルーチンでノルマを消化するのではない。未だ何の方法もなく、どこから手をつければよいかわからない、本質的な問いと未踏の沃野に直面したとき、バルトークは一般的な道具の開発と共にフロンティアに惹かれていった、と私には見える。

バルトークが民謡を採集した背景には進化論や比較言語学、あるいは社会学の考え方がある気がしてならない。彼には「舞踏組曲」という出世作がある。ここではピアノの鍵盤で弾くことができる基礎的な音程、半音から始めて全音（長二度）、短三度、長三度、完全四度、増四度…という基本的な音程から発展・進化して全世界の民族音楽、というよりも人類にとっての「音楽というもの」全体が、ダンスというもっとも［　Ⅰ　］が、変奏の形をとってソウレイに描かれる。

バルトークはこれを「［　a　］」として発表したわけではない。あくまで「［　b　］」として変奏を労作し、「［　c　］」にまとめたものだ。だがこの作品の譜面を読む度に、どうしても私はバルトークに先行する数人の仕事を思い出してしまう。第一は、全世界の人類社会を宗教という観点から捉えなおすプログラムを考え、果たすことなく亡くなった経済・社会学者マックス・ヴェーバーだ。またバルトークの変奏を音楽言語の変化・比較と考えると、比較言語学者フェルディナン・ド・ソシュールと古典文献学者フリードリヒ・ニーチェの仕事を想起する。ニーチェにしてもソシュールにしても、個別の詩や各国言語の微細な差異や構造に注目しつつ、人類にとって詩とは、言葉とは何なのか、さらに言えば人間とはいかなるものか、その核心まで肉薄する仕事をした。

バルトークは新たな道具を持ち込んだ。蠟管蓄音機という前代未聞の装置があれば、各地の民謡を楽譜ではなく直接音の形で収集＝サンプリングできるのだ。バルトークはあきらかに最初からグローバルな計画を持っていた。初めて行った海外民謡調査では地中海を渡ってアルジェリアでフィールドワークしている。ハンガリーの民族主義が動機ならありえない事だ。バルトークは人間にとって歌はどこから発生したのか、人類と音楽の［　Ⅱ　］は何かにぴたりと照準を合わせている。

この同じ問題に、同じ音楽の原点の動機をもって、でもまったく違う角度から、違う道具を手に、アプローチが可能ではないかと、かつて私は考えた。

例えば、私たち自身が母親の胎内にポツンと存在するようになってから、いったいいつ、どんな風に私たちは歌と出会うのか？　音楽はいつ生まれるか？　ラカンの言う鏡像段階は、答えとヒントを与えるだろう。

新生児の「喉」は成人のように咽頭と喉頭が分かれていない。このため「叫喚音」と呼ばれるチンパンジーのような声しか出せない。サルの声なら「ウッキッキー」と表記するだろう。それが赤ん坊だと「オギャー」になる。サルもヒトの赤ん坊も、喉の構造から「あいうえお」の母音を発語し分けることができないのだ。

人間の赤ん坊は二ヶ月頃から「ウクー」とか「クークー」という言葉の原型のような音を発するようになる。「クーイング」と呼ばれるもので、クーイングと前後して赤ちゃんの首が据わる。喉の構造に解剖学的な変化が出、声道が形成され始めると声も変化するのだ。赤ん坊は首が据わると幼いなりに複数の母音を発するようになる。

Ⅲ

「ブー」から「ブー、ブー」や「ブブー」へ、あるいは「バブー」から「バブバブー」へ。こんな、何気なく見過ごせばそれだけの変化に、実は大きな発達の背景がある。「b」よりも繊細な「m」で、幼い母音を二度反復してみれば「mama」になる。私たちはこれを聞いて「あ、初めて言葉を話した！」「ママと呼んだ」と大喜びする。だが実のところ、乳児はほとんどのケースでママしか呼んでいない。

興味深いことに、この時期の赤ん坊の認識には自他の別がないことが知られている。世界には自分と不可分な母親しか存在しない。赤ん坊にとっては「自分＋母親」が全世界なのだ。生まれてこの方オギャーと泣いて呼んで来たのはすべて「世界＝自分と不可分の母親」だけだ。実際胎内にいたときは呼ぶ必要すらなく一体だった。ところが生まれ落ちてへその緒が切れて

しまうと、母親は呼ばねば来ない。だから、ただ泣いた。

これが「鏡像段階」の発達が始まり、発語に母音の分節が現れると、反復が可能になって最初に出て来る音がたまたま「ｍａｍ」とか「ｍａｍａ」と響くのだ。地上のさまざまな文化がこの音で母親を意味するのは、赤ん坊がソレをソレで呼んでいることに起因するのだろう。

もちろん人間の文化は地方や風土、気候によって千差万別でもある。だが、それと同時にホモ・サピエンス全体に通底する、単純で深遠な生理のメカニズムも厳然と存在している。仮にこうした母音子音分節の観点を含め、バルトークのように各国各国の子守唄を調べたら？　その地方の言語で母親を指し示す言葉と、歌と風土と文化を対照するなら？　バルトークに拠りながら、彼が為し得なかった未踏の領野に踏み込むことができるだろう。

鏡像段階以降の子供は、鏡に映る自分を認識するとともに、母親が自分と別の存在であることも知る。さらに、世界には母と自分以外にもさまざまな第三者があり、自分を取り囲む複雑な環境があることも少しずつ知っていく。そしてそれらに、異なる音で「名を付けて」ゆく。自分の興味の範囲、自らにとっての世界が広がり、赤ん坊にとっての世界が複雑になるにつれ、発語の母音や子音も分節が進み、やがて言葉が第三者や対象を指し示す意味を担うようになる。

こうした知見を踏まえ、調音の発達と、自分自身、母親、そしてそれ以外の人の声や外界の音を赤ちゃんがどう認知しているかの詳細はサイエンスの手法で調べることもできる。人が人である本質に触れるリサーチの現場には、驚くべき発見と豊かな響きの欠片が散らばっている。「意味」のない赤ん坊の発語や、子守唄のちょっとした歌詞から、人間という存在の持つ従来は見過ごされていた本質が浮かび上がってくる。音楽は人類の真実を、つつましげに保管し続けてきたタイムカプセルでもある。

（伊東乾『なぜ猫は鏡を見ないか？――音楽と心の進化誌』による）

注　鏡像段階…精神分析学者ジャック・ラカンの用語で、幼児が鏡に映る自分の像から身体的統一感を見出し、自我の形成の基礎とする生後六ヶ月から一八ヶ月の発達段階をいう。

問九　空欄 Ⅰ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　社会性の高い儀礼の変容する過程
ロ　原初的な音楽の形を獲得する過程
ハ　身体性豊かな表現が衰微する過程
ニ　民族性豊かな旋律が発展する過程

問十　空欄 a ～ c に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　a「楽案」・b「楽曲」・c「学説」
ロ　a「楽案」・b「学説」・c「楽曲」
ハ　a「楽曲」・b「楽案」・c「学説」
ニ　a「楽曲」・b「学説」・c「楽案」
ホ　a「学説」・b「楽案」・c「楽曲」
ヘ　a「学説」・b「楽曲」・c「楽案」

問十一　傍線部Ａ「グローバルな計画」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　世界各国の民謡を参考にしてハンガリー民族音楽の確立を目指す計画
ロ　世界各国の民謡を収集し世界の音楽界の学者や作曲家で共有する計画
ハ　世界各国の民謡を比較して世界の音楽に共通する原型を探求する計画
ニ　世界各国の民謡の要素を採集し世界に通用する斬新な音楽を創る計画

問十二　空欄 Ⅱ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　共通する特徴
ロ　構造的な差異
ハ　発達する要因
ニ　本質的な原点

問十三　傍線部B「いったいいつ、どんな風に私たちは歌と出会うのか？　音楽はいつ生まれるか？」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　赤ん坊が複数の音節を発語し分けることを身につけ、異なる音で外側の世界を名付けていく過程に歌の始まりがある。

ロ　赤ん坊が胎内ではへその緒でつながっていた母親に向け、不可分の関係を取り戻そうと泣き叫ぶことに歌の始まりがある。

ハ　赤ん坊がチンパンジーとは異なり、生得的に咽頭と喉頭が分かれ、人でなければできない母音を発声することに歌の始まりがある。

ニ　赤ん坊が母音の反復を習得し初めて意味を持ったママという言葉を発声し、世界と関わりを持つようになることに歌の始まりがある。

問十四　次の四つの文を並べ替えて空欄 **Ⅲ** に入るようにしたとき、**四番目**に来るものはどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　たった二つの母音だけれど、声道を持たないチンパンジーなら生涯、これを発し分けることができない。

ロ　つまり母音の分節がある。

ハ　「ブー」は子音「b」と母音「u」おのおの一つで表記できるが、バブーは子音「b」に「a」と「u」二つの母音が接続する。

ニ　「喃語」と呼ばれるこの「バブー」のたぐいは、人が人でなければ発することのできない言葉や歌の、未分化な源流の一つだ。

問十五　傍線部C「ソレ」と同じことを述べている**五字以上十字以内**の語句を本文の中から抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問十六　次の中から本文の趣旨と合致するものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　バルトークはコダーイと異なり、採集した民謡に自由な発想でアレンジを加え、オリジナル性に富んだ楽曲を作曲した。

ロ　バルトークは進化論や言語学の最新の知見を参照して、自らも音楽の進化の過程を明らかにし、音楽学の分野で新たな学説を唱えた。

ハ　バルトークは開発されたばかりの録音機器を試し、かつて聴いたことがない音に触れることを通じて、人類が音を楽しむ原点を体験した。

ニ　バルトークは録音機器で採集した客観的な音声や人工的なノイズを初めて聴き、録音技術というメディアの特性について科学的に検証した。

問十七　傍線部1・2のカタカナの部分を漢字に直し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（漢字は楷書で丁寧に書くこと）。

（三）次の文章と和歌を読んで、あとの問いに答えよ。これは、平安末から鎌倉初期にかけて活躍した歌人である藤原俊成が、最愛の妻（美福門院加賀）と死別した後に詠み重ねた一連の和歌を、自ら記録したものである。なお、途中に省略した部分がある。

建久四年二月十三日、年ごろの伴（子どもの母）隠れてのち、月日はかなく過ぎ行きて、[1]つごもりがたにもなりにけりと、夕暮れの空もことに、むかしのこと独り思ひ続けて、ものに書きつく

〔A〕くやしくぞひさしく人になれにける別れも深く悲しかりけり

〔B〕さきの世にいかに契りし契りにてかくしも深く悲しかるらむ

〔C〕おのづからしばし忘るる夢もあれば驚かれてぞさらに悲しき

〔D〕山の末いかなる空の果てぞとも通ひて告ぐるまぼろしもがな

〔E〕嘆きつつ春より夏も暮れぬれど別れは今日のここちこそすれ

〔F〕いつまでかこの世の空を眺めつつ夕べの雲をあはれともみむ

また、法性寺[2]所にて

〔G〕思ひかね草の原とて分け来ても心をくだく苔の下かな

〔H〕草の原分くる涙はくだくれど苔の下には答へざりけり

〔I〕苔の下とどまるたまもありといふ行きけむ方はそこと教へよ

これらを、思ひがけず前斎院の御所に、人の伝へ御覧ぜさせたりければ

〔J〕身にしみて音に聞くだに露けきは別れのにはをはらふ秋風

御返しに

〔K〕色ふかきことの葉送る秋風に蓬（よもぎ）のにはの露ぞ散り添ふ

七月九日、秋風あらく吹き、雨そそきける日、左少将まうで来て、帰るとて、書き置きける

〔L〕たまゆらの露も涙もとどまらず亡き人恋ふる宿の秋風

返し

〔M〕秋になり風のすずしく変はるにも涙の露ぞしのに散りける

またの年、二月十三日、忌日に法性寺にとまりたるに、松の嵐激しきを聞きて

〔N〕かりそめの夜半も悲しき松風を絶えずや苔の下に聞くらむ

〔O〕思ひきや千代と契りし我がなかを松の嵐にゆづるべしとは

次の日、[2]所にて

〔P〕いつまでか来てもしのばむ我もまたかくこそ苔の下に朽ちなめ

〔Q〕しのぶとて恋ふとてこの世甲斐ぞ無き永くて果てぬ苔の行方に

その年の秋、ふるさとにて独り月を見て、暁がたまであり

〔R〕しに、おぼえける

〔S〕かくしもは姨捨山（をばすてやま）も無かりけむひとり月見るふるさとの秋

建久九年二月十三日、忌日により法性寺に向かひ、

また[2]所に詣でて、心中思ふところを詠ず

〔S〕別れては六とせ経（ぶ）にけり六つの道いづ方とだになどか知らせぬ

（『俊成家集』による）

注

建久四年…西暦一一九三年。

まぼろし…幻術士。『源氏物語』桐壺巻で、桐壺更衣と死別した帝が詠む「尋ね行くまぼろしもがなつてにても魂（たま）のありかをそこと知るべく」に拠る語。なおこの帝の歌は、白居易の「長恨歌」を踏まえる。

前斎院…後白河法皇の皇女、式子内親王のこと。

姨捨山…信濃国（今の長野県）の歌枕。『古今和歌集』の「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」を踏まえる。

問十八　空欄[1]に入る最も適切な月を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　二月　ロ　三月　ハ　四月　ニ　五月　ホ　六月　ヘ　七月

問十九　和歌〔A〕～〔F〕の中に、他とは句切れが異なるものが一首だけある。それはどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ〔A〕　ロ〔B〕　ハ〔C〕　ニ〔D〕　ホ〔E〕　ヘ〔F〕

問二十　和歌〔C〕に一語だけ用いられている助動詞の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　受身　ロ　過去　ハ　可能　ニ　自発　ホ　推量　ヘ　尊敬

問二十一　空欄 **2** （三箇所ある）に入る最も適切な漢字一字を、和歌〔G〕・〔H〕・〔I〕に共通する語句の意味から考え、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問二十二　傍線部**3**・**4**・**5**が意味する内容として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

3
イ　加賀が帰依していた寺院
ロ　俊成がやって来た法性寺
ハ　加賀の亡魂が赴いた場所
ニ　俊成と妻が暮らした旧宅
ホ　加賀が居る西方極楽浄土
ヘ　俊成と妻だけが知る約束

4
イ　赤く染まった紅葉の葉
ロ　生い茂った常緑樹の森
ハ　供養の為に読む法華経
ニ　心がこもったお見舞い
ホ　この現世に残した執着
ヘ　亡き妻への哀切な思い

5
イ　孤独のうちに悶々と日々を送っていること
ロ　遠く離れた家族を痛切に思いやっていること
ハ　白く置いた霜の上に指で文字を書いていること
ニ　やもめ暮らしがもう二年にわたっていること
ホ　月の光があまりに明るく照らしていること
ヘ　自分の心が全く慰められないでいること

問二十三　和歌〔L〕は俊成の子「左少将」の詠だが、この歌は後に、その「左少将」が撰者のひとりとなった勅撰集『新古今和歌集』に入集する。この「左少将」の著作を次の中から**二つ**選び、解答欄にマークせよ。

イ　『今鏡』　ロ　『近代秀歌』　ハ　『とりかへばや』
ニ　『山家集』　ホ　『松浦宮物語』　ヘ　『無名抄』

問二十四　和歌〔O〕の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　松に待つを掛けて、故人を待っても甲斐無き現実を、松の嵐で象徴している。
ロ　松風の音が愛妻を失った心に悲しく響き渡ることを、素直に歌おうとしている。
ハ　永遠の愛を誓った妻が泉下の人となり、誓いも空しくなったことを悲嘆している。
ニ　今は自然の中で安らかに眠る亡妻を思い、悲しみの中にも心を慰めようとしている。
ホ　君が代の古歌を想起し、千代に八千代にと歌われる松も永遠ではないと諦観している。
ヘ　千代と松が縁語となっており、妻の忌日を一日千秋の思いで迎えた心情を強調している。

問二十五　和歌〔S〕がこのように詠まれた背景には、ある仏教的思想が存在する。直接強く影響していると考えられる最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　愛別離苦　ロ　一期一会　ハ　盛者必衰　ニ　諸行無常　ホ　女人往生　ヘ　輪廻転生

（四）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ（返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

同母之子而長者或為父母所憎、幼者或為父母所愛。此理殆不可曉。竊嘗細思其由、蓋人生一二歲、挙動笑語、自得人憐。雖他人 A 愛之、況父母乎。纔三四歲至五六歲、恣性啼号、多端乖劣、或損動器用、冒犯危険。凡挙動言語皆人之所悪、又多痴頑、不受訓戒。故雖父母亦深悪之。[1]方其長者可悪之時、正値幼者可愛之日。父母移其愛長者之心、而更愛幼者。其憎愛之心従此而分、遂成迤邐。最幼者当可悪之時、[2]下無可愛之者。父母愛無所移、遂終愛之。其勢或如此。為人子者、当知父母愛之所在。長者宜少讓、幼者宜自抑。為父母者、又須覚悟、稍稍回転。不可任意而行、使長者懐怨而幼者縱[3]欲、以致破家也。

（袁采『袁氏世範』による）

注　啼号…泣き叫ぶ。　多端乖劣…いろいろ言うことを聞かない。　器用…器物。　痴頑…愚鈍頑迷。
迤邐…折れ曲がりながら続いていく。　回転…心を入れかえる。

問二十六　空欄 A の中に入る最も適切な一字を次の中から選び、解答欄にマークせよ。
イ 猶　ロ 何　ハ 不　ニ 凡　ホ 使　ヘ 初

問二十七　傍線部1「方其長者可悪之時、正値幼者可愛之日。」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
イ 年上でも憎まれる時があり、年下でも愛されるのに値する時がある。
ロ 年上が憎らしい時が、ちょうど年下がかわいい時にあたる。
ハ 年上の時は常に適切に憎悪に対処し、年下の時は日々適切に愛情に対応する。
ニ 年上の憎しみにきちんと対応できた時こそ、年下から愛されるのに値する。
ホ 年上が時に憎まれても平気でいられるのは、年下が日々慕ってくれるからである。
ヘ 年上が憎まれている理由を反省するのは、年下の無邪気さを見る時である。

問二十八　傍線部2「下無可愛之者。」とある理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
イ それより幼い者はいないから。
ロ それより尊い者はいないから。
ハ それより惜しまれる者はいないから。
ニ それより憎たらしい者はいないから。
ホ それより仲のよい者はいないから。
ヘ それよりなついてくれる者はいないから。

問二十九　傍線部3「縱」とほぼ同じ意味になる語を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
イ 愛　ロ 恣　ハ 損　ニ 訓　ホ 抑　ヘ 覚

〔以下余白〕

〈2018 H30122024〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意）所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

（採点欄）

（一）問一

（二）問十五

（二）問十七

（三）問二十一

〈2018 H30122024〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意）所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

国語（記述解答用紙）

（一）問一

（二）問十五

（二）問十七

1

2

（三）問二十一